

---

# ブックワールド

昂綺羅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブックワールド

### 【Nコード】

N8477S

### 【作者名】

昂綺羅

### 【あらすじ】

生徒は学校に急いでいた。

遅刻が危ぶまれる中、普段使わない裏道を使おうとして道に迷う。そこで見つけた本を拾った事で、世界を救う救世主になる事を選択された。

(前書き)

という訳で、ファンタジー初挑戦！

生徒は急いでいた。ゆえにいつもは使わない裏道を使おうとした。生徒はホントに急いでいたのだろう。ゴミ箱を倒そうと、猫を踏みつけようと、生徒は気付かなかった。

裏路地の半分くらいを進んだ当たりで異常に気付く。

「あれ？道を間違えたかな？」

しかし、一回目はこの程度にしか思わない。少し引き返して別の道を進んでみる。

「ん？どの道だっけ？」

二回目からは焦りが混じる。自分は道を間違えた、それゆえの遅刻への焦り。

「あれ？」

そこからただ道を引き返す事も出来なくなっていた。生徒が通っていた路地はそこまで複雑な路地ではない。しかしどこに引き返しても見覚えのある道に出ない。

「迷った」

というよりも、出口が消えた。そう表現した方が正しい。

生徒の焦りは、遅刻への焦りではなく出れないことへの焦りへと変わっていた。

「くそ！こつちで合ってるだろ！？」

そして他とは明らかに違う場所へ出る。そこは他と変わらず汚く閉鎖的であったが、少しだけ広くなっており、ベンチなども置いてあった。

「……………」

何より見た目は他と同じであったが、雰囲気は全く違った。そこに漂う空気はどことなく神聖で、厳かな気持ちにさせられた。

（疲れたな）

そこに着いた途端焦りは消え、少し休んでいくか、という気分

なった。そういう気分になった最大の理由はおそらく、おかれていたベンチだろう。

小汚くはあったが座りたくないと思う程ではなかったし、生徒はそのベンチを見て思ってしまったのだ。

(そこに神様が居るみたいだ)

座ってみるとそこは座り心地が思いのほか良かったようで

(眠い)

寝てはいけない、そう思いながらもそこから離れられず生徒は眠りについてしまった。

月灯りのおかしな裏路地、そこには無防備に眠る生徒がいた。

「ん、ん」

生徒は起きると目をこすりながら時計を確認した。

(えーと、時間は……十時かぁ、学校行かなくちゃな。ん？PM?)

「午後十時?!?」

生徒は声を張り上げて驚いた。しかしそれを咎める人もココには居ない。

(俺は今日一日学校をさぼったのかよ!)

生徒はベンチの上で暴れまわる。

ゴッ

「あれ?」

そうすると手に当たる感触がある。

「これは、本?」

その本は生徒が眠りに就く時は無かったものだった。

(ん、人が来たのかな?取られて困るものはないけど)

そう思いながらも一応鞆の中を確認する。

(盗られたものはなし……あれ?)

確認が済んだ生徒はさっきより少し明るい事に気づく。そして置いてある本に目をやると

(うっすら光ってる?!)

本は光っていた。

「蛍光塗料でも塗ってあんのか？」

生徒は初めて本を手にとって見た。

「タイトルも何も書かれてねえ、赤いだけだ。どこで買ったんだ？  
こんな本」

そうして本を裏返して見るとおかしな記述を見つけた。その本の

裏の右下には

「みやむかえ宮迎……………みつひこ光彦……………」

生徒の名前が書かれていた。

その記述を見ていよいよおかしいと感じた生徒は中身を見る事にする。

「はあ？」

中の1ページ目には大きめに

『世界を救いませんか？』

と書かれているだけだった。

「いきなり世界を救うって、どんな話だよ」

興味をそそられページをめくるが、続く2ページ目以降には何も書かれていなかった。

「……………ホントに何なんだこの本は」

そうして1ページ目に戻ると

『世界を救いましょう』

若干文が変わっていた。

「ははは、俺の記憶力って低いんだな」

口では笑いながらも、生徒はその本に恐怖を感じていた。

その時、ページの記述がまた変わる。

『世界は貴方にしか救えない』

読み終わると新たに記述が増える。

『救う意思があるなら、表紙に手をかざしなさい。そうすればあなたは救世し』

そこまで追加されたところで本を閉じた。いや、叩きつけた。

「何なんだよ。路地から出られなくなるわ、夜まで寝るわ、おかしな本を拾うわ。ああ、学校にも行ってなかった。内申に響くかなあ。家に帰れないし明日も学校サボりかよ」

生徒が現実逃避を始めたとき、声が聞こえた。

「帰れないんですか？」

「!？」

その声には生徒は希望を抱くが、声の主が見当たらなかった。

「たぶん、その本の所為ですよ。私も苦労しましたが、手をかざせば家に帰れました」

「だれだ!どこに居る!？」

人もいないのをいいことに、生徒は叫んだ。

「どこつて、アースですけど」

(アース?地球つて)

「馬鹿にしてんのか!」

「ひい!すいません」

そのやり取りの途中で生徒は気付いていた、そのあり得ない現実

に。

そう、声は本から聞こえていた。

生徒は、恐る恐る本に近づく。  
「すいません、馬鹿にしてる訳じゃないんです。でも、私がいるのはアースですし、あなたに詳しい地名言っても分からないだろうし、とりあえずその本呼んでください」

異常な事態に混乱していた少年は藁にもすがる思いで本を開く。

1ページ目は先ほどと変わらなかった。

『そうすればあなたは救世主になれる』

と、先ほどの読みかけの文が完成していただけた。

そうして生徒は希望を託して2ページ目をめくる。

『あなたの地球とリアナのアース、2つを救う方法は必ずしも相反するものではない』

「……リアナというのはお前か」

生徒は本に話しかける。

「はえ？そうですよ、私はリアナ＝リハンです」

「そうか」

その質問の後、再度本を読みに戻る。

『2つの世界の寿命は後1年、用意された救世主は二人』

そこで、文は終わっていた。

「読み終わりました？」

「ああ、要するにお前の言うアースと俺の言う地球が違うことは理解できた」

異常な事態の所為か、生徒は状況を受け入れるのに抵抗はなかった。

「しかし、世界の寿命というのは何だ？滅びるということか？」

「そうですよ、詳しい説明は……とりあえず表紙に手をかざしてもらって良いですか？直接お話ししたいんです」

そう言われて生徒は本の中の一節を思い出した。

『救う意思があるなら、表紙に手をかざしなさい。そうすればあなたは救世主になれる』

「えーと、こうか？」

生徒は表紙に手をかざしたすると

「うわ！」

本は強く光り、生徒は気を失った。

時刻は12時前、相変わらずの月灯り。

「ん、ん〜」

生徒は、今日3度目の目覚めを味わう。

（あれ？本は？）

気付くと手元に本があった。

「夢落ちという訳にはいかないか」

そう言っただけで自分の部屋だった。自分の部屋なのだが。

「今日は、疲れてるみたいだなあ。何か余計な物が見える」



「大丈夫ですか、世界を救うんですから体調には気を付けないと」  
声の調子からしてリアナと思われる人物が自分の部屋に居た。

「それじゃあ、救世の仕組みについて説明始めてもいいですか？」  
こうして生徒宮迎 光彦の救世は始まった。

(後書き)

ええ、短編じゃまとまりきりません。

反応が良ければ、連載にまわしたいです。

一応、続きのストーリーも考えてます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8477s/>

---

ブックワールド

2011年5月2日01時55分発行